法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-05-09

埴谷雄高『死霊』論 : その構想の検討

田辺, 友祐 / Tanabe, Yusuke

(出版者 / Publisher)
法政大学国文学会
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
日本文学誌要 / 日本文学誌要
(巻 / Volume)
73
(開始ページ / Start Page)
65
(終了ページ / End Page)
75
(発行年 / Year)
2006-03
(URL)
https://doi.org/10.15002/00010123

Hosei University Repository

埴谷雄高『死霊』論——その構想の検討

田辺友祐

はじめに

武者小路実篤「わしも知らない」（『中央公論』一九一四年一月号）は、釈迦と日蓮の問答が繰り広げられる戯曲である。一方で、釈迦と大雄の対話を結末部の近くに据える構想を持っていたのが、埴谷雄高の『死霊』である。この作品は、一九三〇年代前半に原初の着想が築かれ、一九九七年の作者の逝去によって未完に終わった。雑誌『近代文学』での連載開始は一九四六年一月の創刊号からで、以後、長期の断絶や発表舞台の変更を含みながらも、断続的に五〇年もの長きに渡って持続した。当初の構想に遡るならば、六〇年近くの持続力を誇った稀有な作品である。

埴谷雄高は至る所で『死霊』の構想を公表している。夙に真善美社版『死霊』（一九四八年一〇月）の「自序」で、このように述べている。

> ヒマラヤに似た美しい白い雪をかむったその高山へ辿り着いた釈迦は深く暗い洞窟のなかへ大雄の前まで静かに進んでゆく……。これが私のヴィジョンの出発点である。この釈迦と大雄の対話の章は作中人物が語る一つの物語としてこの作品の最後近く現れる筈であって、この作品全体の観念の中心をなしている。

続篇の構想の発表は、対談や座談会で相手の質問に答える形で述べたものが多い。その傾向が顕著になるのは、一九六〇年代後半からである。当時は、一九七五年の『死霊』五章発表前夜にあたり、着想から執筆に推移した頃である。さらに、埴谷雄高研究の黎明期に相当し、理解者が漸増し始めた時期でもある。即ち、『死霊』再開の陰には、自身を取り巻く環境の発展

Hosei University Repository

があった。これ以後、晩年迄、『死霊』の腹案が語り続けられる。当初の予定は全三〇章であったとされるが、次第に縮小されていく。そして、一九九五年に九章「《虚体》論――大宇宙の夢」を発表した二年後、作家は逝去した。九章と「九章未定稿」を以て完成したと捉える意見もあるが（大江健三郎「『死霊』の終わり方」『群像』一九九九年四月号）、本稿では未完と見做す。

『神聖喜劇』執筆時の大西巨人は、埴谷雄高と次のような会話を交わしたという。

二人ともいつまでたっても小説が終わらんでしょう。そしたら、「僕の『死霊』は終わらせることができる。〈ある朝起きてみたら皆死んでいた〉って書けばいい。しかし、君の小説は主人公が戦後に生きとることが冒頭から明らかになっとるから、死んだというわけにはいかんから、こりゃ終わりようがないな」と（一同・笑）。それもそうだなと思って。ところが、私は終わったけど、あの人の方が終わらなかった。

（大西巨人「インタビュー　私小説は小説か文学か」『私小説研究』第五号、法政大学大学院私小説研究会、二〇〇四年三月）

『死霊』が未完成に終わるであろうとの予測も、晩年の埴谷雄高が随所で述べている。この作品は、五日間の出来事を描くと予告されている。最終章の九章は、まだ三日目の昼に過ぎない。しかし、作者が章題を「《虚体》論――大宇宙の夢」と命名したのは、この章をもって大団円を迎える示唆になっている。作者が考え続けた「虚体」の集大成が、最終章に込められた。一〇章以降の内容も明かされてはいるが、遂に描かれなかった。

本稿では、まず、『死霊』の構想の歴史を辿り、その変遷を整理する。また、執筆に影響を与えたと思われる研究の発展や同時代史などの諸種の要素も見逃せない。さらに、『死霊』の作者と読者には、一方通行ではなく双方向の関係があったといえる。これらの点を通じて、『死霊』の一側面を照射する。

一

『死霊』の構想が練り始められたのは、一九三二年頃である。当初の題は、「惟覲る人」（秋山駿・埴谷雄高「『死霊』の発想と未来像」『全集現代文学の発見』第七巻月報一、學藝書林、一九六七年一一月）であった。

私の内部で思索と文学的想像力のふしぎな交錯がはじまったのは、夏の七月、鉄格子のはまった高窓のそとにはまだ青空が覗かれ、コンクリート塀の向こうでは嬉戯するこどもたちの騒音が響いているのにもはや寝なければならないころからなのであった。七時に寝なければならないけれども、それから数時間はじっとしたままもの思いにふけっている不眠症の私は、暗い頭蓋のなかで組みたてたプロットを毎日わずかずつ展開してゆき、そのなかの諸人物

Hosei University Repository

に思い屈した観念を負わせるという作業を開始したのであって、そのなかには、留置場で強烈な印象を私にあたえた〈私のガージン〉もまたいたのである。

（『影絵の世界』）

一九三二年五月から一年半の間、豊多摩刑務所に収監された埴谷雄高は、のちにそこを「私の大学」（「あまりに近代文学的な」『文學界』一九五一年七月号）と名付けた。例えば、カント『純粋理性批判』を読んで驚愕するなど、形而上学的な土台を培う日々であった。この場所で、「思索と文学的想像力」と読書によって織り成した内的世界が、即ち『死霊』の祖型である。

はじめは『惟覦る人』という題が頭にあった。そういう直接的行動者を外からただ見ている人物がいて、この人物が自分の一歩を踏みだせぬ無行動な精神内部を掘り下げてみる――そういう形にして対立面をつくろうとしたんです。第三章で筒袖の健坊（ママ）っていう一種暴力的な人物が出て来ますけど、これが原型の一部を残している……。

（「『死霊』の発想と未来像」）

字引で「惟」と「覦」を調べると、それぞれ以下のように説明されている。「惟」は、「もと『思う』意の動詞だが、単に思うのでなく一事を思うこと」。「覦」は、「諸侯が天子に謁見する」、または、「天子が群臣に会見する」意味であるという（『新明解漢和辞典』）。無行動な人物の外的要素が不明瞭であるために、「覦」を用いた妥当性は判断出来ないが、埴谷雄高には難解な漢字を多用する傾向がある。例えば、未來社から刊行した評論集や対談集には、「濠渠」「彌撒」「橄欖」「塋窟」「海嘯」などの難読な熟語が漲溢している。

さて、「〈私のガージン〉」から着想を得た「筒袖の拳坊」は、しかし、描かれた作品では後景に退いている。登場頻度は僅かで、三章以外では、続く四章の霧に覆われた運河の周辺での極めて朧気な姿を、三輪与志に目撃される程度である。五章以降では、全く現れない。作者の自己解説によれば、観念の発展の末に発案した「虚体」を作品の主軸に据えた結果、「現実離れした非現実世界を思考実験だけで作ることになってしまった」（「生命・宇宙・人類」『太陽』一九九二年六月号）という。その一方で、揺籃期の作品の『洞窟』と『不合理ゆえに吾信ず』には、「筒袖の拳坊」が担っていた側面の残存と思われる要素が垣間見える。また、鹿島徹『埴谷雄高と存在論』（平凡社、二〇〇〇年一〇月）で、『死霊』の原初の構想に存在した「民衆の暴力性」を重要視する視座が提出されている。暴力の希薄化は、「社会革命」から「存在の革命」に変移した埴谷雄高の姿勢の投影であろう。M・ヴェーバーが『職業としての政治』（一九一九年）で、政治権力の背後には暴力が控えていると指摘したように、埴谷雄高も、一九五〇年代後半から量産する政治評論で、政治に潜む暴力を批判している。『死霊』五章でも、青年時代の「社会革命」との訣別を文学的に昇華させている。

このように、暴力を体現する予定であった「筒袖の拳坊」の

Hosei University Repository

後退によって、『死霊』の観念性が極めて高くなった。「筒袖の拳坊」と入れ替わるように、三輪与志ら四兄弟が重要人物として造形された。四人兄弟という設定は、ドストエフスキー『カラマーゾフの兄弟』の影響であるとともに、膨張した異なる思考を整理する工夫でもある。

一九三〇年代後半に、喫茶店で『死霊』の構想を聞いた平野謙は、「実に馬鹿なことを考えている奴だと哀れむふうに私を眺めた」（「なぜ書くか」『群像』一九四九年三月号）とされる。「戦争中のこと――平野謙の追想」（『文藝』一九七八年六月号）では、「全否定者と肯定者の対話といった妄想についての興味をもそこに示しながら、彼は最後まで聞いていた」と補足している。なお、埴谷雄高によれば、平野謙が構想の「最初の聞き手」である。しかし、構想が作品に結実する迄には、短篇『洞窟』と断片集『不合理ゆえに吾信ず』、さらに、二冊の翻訳と一冊の美術評論を挟まなければならない。

この作家が、自身も体験したプロレタリア運動の転向の時代から、終戦にいたるまでの険しく長かった歳月を、その暗い体験に根ざした諸観念のもっぱら抽象的思弁的展開によってつくりだす独自な形而上学によってしのいできたこと、つまり、そこだけへはいかなる外的強制も手をふれさせぬ内的拠点として自我の思弁を強化してきたこと、このことこそ「死霊」においての観念の異常な強さとなって現れたのであった。

（小田切秀雄「文学の歩み」『新日本文学』一九四九年七月号）

『不合理ゆえに吾信ず』に用いられた幾つかの箴言や語彙は、『死霊』にも転用されている。また、自身初の刊行物となった『ダニューブ』の邦訳については、「この本を翻訳するうちに自分の文体ができた」（白川正芳『埴谷雄高の肖像』、慶應義塾大学出版会、二〇〇四年一一月）と証言している。戦時下に『死霊』を作品化出来なかったのは、時局の激化、発表舞台の消滅、構想の未成などの理由が考えられる。

さて、『死霊』の当初の予定は全三〇章であったとされるが、一九八三年には一五章（座談会「『死霊』の展開」『現点』創刊号、一九八三年二月）、一九九二年には九章（対談『生命・宇宙・人類』）と、次第に規模を縮小していく。一九九五年の九章発表後に数回に渡って発表された「『死霊』断章」は、九章の続篇ではない。『死霊』の諸要素の断片化ではあるが、三輪与志や津田安寿子のような登場人物もおらず、内容的にも断絶している。いわゆる「九章未定稿」も、九章本体の末部との連続性に欠けている。この未定稿の問題は、立石伯「小説の封印――埴谷雄高『死霊』の〈未完〉に関する覚書――」（『星雲』第三十号、一九九八年二月）で詳細に検討されている。

『埴谷雄高全集』未収録の座談会「『死霊』の展開」では、七章「最後の審判」と最後の場面についての詳細な計画を述べている。そして、一九八〇年代からは、『死霊』は未完成に終わるであろうとの発言を行なうようになる。よく知られているように、一九六〇年代後半から七〇年代前半に、『レイテ戦記』『豊

Hosei University Repository

饒の海』『青年の環』『富士』『死の島』といった長篇が相次いで完成したが、『停れる時の合間に』と『死霊』は、これらと歩調を同じくせず、独自の道を進んだ。もっとも、一九七〇年代に両作品が長い沈黙を破った背景には、右の諸作品の完成があるのではないか。

最終章となった九章の着想を初めて披瀝したのは、対談「『宇宙的思惟』」（『週刊読書人』一九七五年七月一四日号）である。この時点では五章迄が発表済みであったが、執筆計画の大枠は整っていたといえる。五章発表以降は、未完成の示唆と、執筆中の章で抱えている難問に関する現状報告が増す。

（……）三輪家の四人兄弟がそれぞれ自己の内面を告白する思想的な内容がぼくにとってとても難しくて、その思想的課題を考えているだけでさっぱり進まない。

（座談会「思索的渇望の世界」『海』一九七五年一一月号）

私は、いま、無限大の道を歩きながら話しあいつづけているヘラクレイトスとデモクリトスの対話を、『死霊』八章のなかの一挿話として書いている。遅々として進まぬ、極めて困難の作業である。

（「動かされぬ駒」『毎日新聞』一九八五年八月五日夕刊）

九章がいちばん難しい。先ほど言った無出現と未出現の差だけでもものすごく難しくて、三年近くストップしている。青服のところで。どうにもうまくゆきません。

（対談『生老病死』、三輪書店、一九九四年一二月）

埴谷雄高が『死霊』に対して行なった自己解説は、発表済みの内容の解説と続篇の構想の説明に二分出来る。次の文章にあるように、日常生活でも続章の構成を語っていた。

埴谷さんは『死霊』の書かれてしまった部分ではなく、執筆中の、あるいは構想中の部分についてよく話した。六章執筆中のことだったが、とつぜん紙と鉛筆をとりだしてボートの平面図を描き、ここに津田夫人がつかまっていて、ここに黒川建吉がいて、と例の隅田川とおぼしき河の真ん中で転覆したボートの情景を懇切に解説してくれたこともあった。

（栗原幸夫「『《死霊》了』を考える」『埴谷雄高全集』第一五巻月報一五、講談社、二〇〇〇年七月）

作品内の数々の観念的な部分は難所であったが、先に人物の行動や配置の綿密な設定が築かれていた。「いちばん難しい」と吐露した九章でも、津田安寿子の誕生会の出席者や席順は、早くから決定していたのではないか。

ところで、『死霊』の執筆には膨大な時間を費したが、作品発表が拙速に陥らなかったのは、編集者の理解の賜物であろう。しかし、次の指摘のように、大半の作家にとっては実情が異なる。

Hosei University Repository

「今の日本の社会は、作家がゆっくりと時間をかけて、精神を集中して、ひとつの作品を熟成させるのには、構造的に向いていない」というのはおそらくだれの目にも明らかな事実でしょう。

（村上春樹『若い読者のための短編小説案内』、文藝春秋、一九九七年一〇月）

例えば、一月と七月に発表される高名な文学賞を受賞した若手・中堅作家は、数多の取材や執筆依頼の攻勢に見舞われる。また、『ノルウェイの森』（講談社、一九八七年九月）のように、作品が驚異的な発行部数を記録した場合も同様である。或いは、『8月の果て』（新潮社、二〇〇四年八月）のように、作品が成熟する以前に新聞連載が打ち切りとなり、掲載先の変更を余儀なくされた例もある。だが、埴谷雄高の場合、五章からの『死霊』を、『群像』が不定期に掲載し続けた。五章の本格的な執筆が始まる前には、講談社が社の施設を提供している。『群像』の歴代の担当編集者に対する感謝を述べた文章もある（「超緩速度」『群像』一九八六年一〇月号）。

在りし日の埴谷雄高と親交があり、対談も行なった大江健三郎が、自己の構想について、次のような発言をしている。

小説というものは、じつはこういうあらすじによって先の先まで構想するのがいいとは限らないんです。私の経験ではむしろ逆です。すぐ先の展開までしか構想しないで、実際には、毎日、少しずつ細部をしっかり作りあげて、確実な言葉を書き込んで行く、というようにしなければなりません。

（大江健三郎「『夢を見る人』のタイムマシン」『「話して考える」と「書いて考える」』所収、集英社、二〇〇四年一〇月　傍点原文）

構想の大きな枠組みを組み立てたうえで、細部を練るのが埴谷雄高の執筆方法であって、右の意見とは些か異なる。『死霊』「自序」で釈迦と大雄の対峙を述べたのは、結末部の固定化であるが、それが完結のための障壁に化した一面は否定出来ない。換言すれば、作品の随所で、掉尾への道筋から迂回せざるを得なくなったのではないか。

また、嘗て吉本隆明は埴谷雄高に、伊豆に籠って『死霊』を完成させるように勧めた。戦時下に行なった『偉大なる憤怒の書』の翻訳を、伊豆の温泉旅館にて二十数日で仕上げたと明かした埴谷雄高の発言を受けての勧告であった。

以上の点を鑑みれば、『死霊』の進行は頗る難渋したが、作品を取り巻く環境には恵まれていたといえる。

二

彼の思想は変化しないがゆえに、時代状況に即応しえないという弱みをもつ。と同時にそのつどの社会的ないしは思想的な短期変動に左右されない強みをもあわせもつ。

（鹿島徹前掲書）

Hosei University Repository

確かに、『死霊』には時代の直接的反映がみられない。

八章は、津田安寿子を前面に押し出しており、三輪与志ら四兄弟が全く姿を見せない唯一の章である。島弘之「事後承諾を拒む小説――『死霊』について」（『早稲田文学』一九八八年五月号）では、「女性を無知の権化として捉えるかのような性向が埴谷雄高には見受けられる」と批判されている。この点は、埴谷雄高も自覚していた。

白川正芳君が僕のことを論じている中で、女性の愛に寄せる夢想が僕にまったく欠けてるのが欠点だといってますが……そのとおりです。　（「『死霊』の発想と未来像」）

僕の小説は、女性に色気がない色気がないと言われるわけですけれど、本当に女性についてはダメなんですよ。しかも、控えめで男を横から鼓舞する女性ばかり登場して、現在の「自立」型女性の発展に資するところがまったくない。ただ男だけがしゃべりにしゃべってばかりいて。いくら津田安寿子が最後に形而上存在になったところで、それ以前の扱い方がとても悪すぎて、女性の読者には非常にうらまれるわけなんです。　（「『死霊』の展開」）

津田安寿子の内面の急激な成長は、時代の変化と通底する。八章の発表は、『群像』一九八六年九月号である。この年は、男女雇用機会均等法の施行や日本社会党で土井たか子が委員長に就任するなど、女性を取り巻く環境が変化する兆しを見せていた。埴谷雄高が、このような社会情勢を自覚的に取り入れたとは思えない。しかし、三輪与志が独白するとされる最後の場面を、津田安寿子が理解するための布石を打ったのが八章であり、その内容と時代状況に一致する点があった、と考えられる。

女性が男性と対等なものとして存在しない人間の集団は、文芸作品として根本的に不完全なものである。女性なしの人間群は、真の人間群ではない。

（伊藤整『改訂文学入門』、光文社、一九五四年一〇月）

続く九章でも、津田安寿子は自らの誕生会の主賓として躍動的に振る舞うばかりでなく、作品の核心を追求する役割も果たしている。津田安寿子の重用は、当初の構想にはなかった展開であろうが、作品の瑕疵の訂正にもなった。付言すれば、女性への焦点化によって、作品の奥行きが深まったのである。

作品の深化を考える際には、中断期間に発表した夢に関する短篇群や政治評論との関連にも目を向ける必要がある。途絶期の文学活動は、川西政明『謎解き「死霊」論』（河出書房新社、一九九六年一〇月）に指摘があるように、四章迄と五章以降の差異を探る上での手掛かりを含んでいる。

短篇集『闇のなかの黒い馬』は、『死霊』から派生した夢の作品群である。他の短篇『洞窟』『意識』『虚空』『深淵』も、『死霊』の主題と連関の強い要素を内包しつつ、一方では、一個の作品として独立している。埴谷雄高の創作活動に於いては、

Hosei University Repository

唯一の長篇が主体であるが、それぞれの短篇も、『死霊』の構想を源とする産物である。

これらの短篇では、「夢魔」の出現方法の試用や、夢を媒介にして存在に迫るなど、多様な文学実験が繰り広げられている。例えば、『深淵』に於いて、前衛党内部に生じた階級制度を批判する箇所は、五章で繰り広げられる三輪高志の自己告白に繋がっている。また、『闇のなかの黒い馬』は、『死霊』五章の準備期間にあたる時期の作品であり、七章に於いて首猛夫の夢のなかで矢場徹吾が独白する工夫を編み出す契機になったのではないか。続く八章で亡き尾木節子の顔の輪郭が宙空に浮かび上がる場面も、『神の白い顔』で用いた着想に近しい。

中断期の文学活動の二極は、夢を主題にした短篇と政治評論である。この時期に発表した政治評論に関する自己解説がある。

> 政治についての私のエッセイは、よくいえば、一種理想主義的な本質論で、端的にいえば、私自身の嘗ての体験を濾過したにすぎないところの机上の空論であって、しかも、どちらかといえば、一種文学的な視点と構造をもった極めて非具体的なものであるが、そうした種類の政治のさらに極端化した一種凝集圧搾されたかたちは『死霊』のなかにも幾つかとりこまれる筈であった。
>
> （「回復期の仕事」『文藝』一九七七年六月号）

『死霊』五章とは、夢の短篇群と政治評論の融合であると要約出来る。以降の章にも、夢を扱った箇所は複数あるのだが、政治と夢の双方を一つの章で取り上げたのは、五章のみであった。埴谷雄高は、自身の短篇を低く位置付けているものの、『死霊』との関係で捉えた場合、その重要性が浮かび上がってくる。五章以降の『死霊』は、「存在の革命」に主眼が置かれたために、政治的言説は影を潜める。

ところで、「存在の革命」を成し遂げたとされる世界が、その五章で示されていた。しかし、内実は「亡霊宇宙」に過ぎないと三輪高志が看破する。この他にも、作品の随所で宇宙に関する語彙が頻出する。戦時下の埴谷雄高は、荒正人とともに、天文学と探偵小説について談義したという。

> この宇宙のそとにこの宇宙とはまったく異なった亡霊宇宙があって、永遠と永遠のあいだを漂っているという説を私はもっていたので、その茫洋たるイメージを展開すると、彼はその亡霊宇宙という言葉がすっかり気にいった。
>
> （「異常児荒正人」『新潮』一九五六年五月号）

平野謙に語った『死霊』の原型と、荒正人に説いた「亡霊宇宙」は、この時点では未だ別個の発想である。また、後者は、いわば異次元の宇宙の比喩にとどまっている。しかし、『死霊』五章では、意識や存在の新たな様式を問うために創案した別の宇宙という具体的な意義を持つに至る。天文学の専門書を読んで涵養し、さらには独自に案出した宇宙論を取り入れた『死霊』は、構想が膨張し、長編として展開する。最終章となった九章には、宇宙的な雰囲気が充溢しており、半世紀近く書き続けた

Hosei University Repository

『死霊』ばかりでなく自身の宇宙論の集大成にもなっている。このように考えるとき、宇宙論の発展が作品に及ぼした影響も見過ごせないのである。埴谷雄高の宇宙については、稿を改めて述べたい。

夢の短篇や政治評論、宇宙論が、『死霊』の構想を大きく変化させたとはいえないが、しかし、着想の細部の具体化には貢献したといえよう。

三

特集「文学と人生」の企画された『思想の科学』一九五四年一〇月号について、次の意見がある。

『風媒花』『真空地帯』『火の鳥』については大衆の文学批評と、それにたいする作家の回答が併載されているが、そこに露呈されているのは、専門家の意見と大衆の生活感覚とのほとんど決定的な落差である。それぞれの作家の代表作であり、戦後文学史を飾るこれらの名作は、庶民の読者から拒絶反応を持って迎えられるのである。

（前田愛「読者論小史」、書き下ろし、『近代読者の成立』所収、有精堂出版、一九七三年）

『死霊』も同様で、二つの出版社（真善美社、近代生活社）の経営難に拍車を掛けたとされるように、読者の数には恵まれなかった。しかし、『死霊』一～三章を収録した『全集現代文学の発見』第七巻や『埴谷雄高作品集』第一巻（河出書房新社、一九七一年三月）は、好調な売れ行きであったという。『全集現代文学の発見』第七巻の旧版の帯には、「まぼろしの名作埴谷雄高・死霊」とある。希少価値ゆえの好評と考えられなくもないが、いずれにせよ、『死霊』は読み継がれている。二〇〇三年刊行の講談社文芸文庫版も、新たな読者を得た。

ところで、筒井康隆「作家にとってのよい文芸評論とは」（『噂の真相』一九九一年七月号）に、以下のような箇所がある。

作家にとって、やはりよい文芸評論というのは、本人も気づかなかったような無意識の意図を喚起させ、新たなテーマを見つけて書く気を起させるようなものでなくてはならない。（中略）

もとより評論は論じられる作家のためだけにあるのではない。しかし事実として、このように作品の隠れたテーマを論じられることの多い幸福な作家が、よい作品を書く上で、そうでない作家より幾倍も有利であることは確かなことだ。自分が見失い、あるいは意識化していなかった意図が顕在化された時、作家はさらに前進できそうな道を発見するのである。

埴谷雄高の場合、座談会や対談などで、感銘を受けたと思われる『死霊』論や埴谷雄高論の紹介を行なった例がある。逆に、埴谷雄高自身が文芸時評を手掛けた時期もあり、作家の創作意欲を刺激したであろう。「氏は新人たちにその作品について批

Hosei University Repository

評するとき、殆ど欠点を指摘されない。むしろ、なんとかかすかにでもある良い点をのばそうとされるように思われる」（北杜夫「わたくし事」『近代文学』終刊号、一九六四年八月）という証言がある。

読者との関係でいえば、埴谷雄高には、「迷路のなかの継走者――読者について――」（『近代文学』一九五五年六月号）という読者論がある。そのなかで、自分と同じ思考ではない者を排除するために作品を複雑化したが、一方で、少数の同調者を受け入れるための工夫をも施したという。

もし一筋の糸のはしを掴めば、訳の解らぬ私の迷路は忽ちにして障壁がたたみこまれて全体が見渡せるようになってしまうという構造に仕上げたのである。

それらの具体的な箇所については述べていないが、例えば、一章に於いて、首猛夫が矢場徹吾の病室を問い質した場面や、三輪高志と与志が首猛夫や矢場徹吾と兄弟であるとの示唆などが、「一筋の糸のはし」に相当するであろう。

欧州旅行の直前に、対談で詳しい構想を公表した埴谷雄高を、本多秋五が批判している。「そこまで話して聞かせるのは、埴谷雄高の例のサーヴィス過剰である。そこでムッと沈黙してほしかった」と述べた上で、「この対談は、彼の旅行直前に行なわれたものだから、長い海外旅行の途中、もし万一のことがあったら、と考えて彼はそこを語ったのだろうか」（「『死霊』入門」『日本文学全集第八四巻　埴谷雄高・堀田善衛』解説、集英社、一九六八年一一月）と推察している。埴谷雄高は、それから二十数年経っても、「できないのに、予定ばかり答えているから、本多秋五には怒られますね」（「生命・宇宙・人類」）と、過去の非難を持ち出している。構想の発表は、しかし、「サーヴィス過剰」であるばかりでなく、少数の読者に向けた「一筋の糸のはし」でもあろう。埴谷雄高が規定する理想的な「読者」とは、即ち、「期待の地平」（H・R・ヤウス『挑発としての文学史』、一九七〇年）に立つ読者である。

『死霊』及び埴谷雄高研究の本格的な暁鐘が鳴ったのは、一九六〇年代後半からである。もっとも、「埴谷雄高論が盛んになるのは、なんと言っても、政治思想家として畏怖され大きな存在となり始める安保闘争時の昭和三四、五年頃」（石崎等「埴谷雄高」『國文學　解釈と教材の研究』一九七三年一二月号）という指摘があるが、その当時は、「政治思想家」の側面に重点を置いた研究が大半で、作家としての活動を追究した論考は多くはない。一九六〇年代後半の白川正芳『埴谷雄高論』（書肆深夜叢書、一九六七年六月）と森川達也『埴谷雄高論』（審美社、一九六八年九月）の上梓によって、埴谷雄高の包括的な研究が始まったといえる。その直後、菅谷規矩雄『無言の現在詩の原理あるいは埴谷雄高論』（イザラ書房、一九七〇年五月）、立石伯『埴谷雄高の世界』（講談社、一九七一年七月）などが続いた。埴谷雄高の側でも、『埴谷雄高作品集』（河出書房新社）が刊行され、研究の促進の一助となったであろう。前述のように、この頃から埴谷雄高は、『死霊』の構想を随所で述べ始める。相次ぐ研究書の刊行が作家に如何なる影響を与えたのかは

Hosei University Repository

計り知れないが、続篇の構想を盛んに公表した背景には、理解者の増加があったと考えられる。このように、作品の膾炙と研究の進展には、連動性を見出せる。

既に述べたとおり、『死霊』は未完成に終わったが、一〇章以降の計画も伝わっている（川西政明『謎解き「死霊」論』）。作品の最重要箇所になり得たと想定される三輪与志の自己告白などは、実際には書かれなかったとはいえ興味深い内容であり、それは同時に、『死霊』の果てしない広がりをも示している。埴谷雄高は、「アンケート」（『文藝』一九六三年一〇月号）に於ける「『死霊』完結の予定は？」の問いに、「死ぬまでに。できねば『紅楼夢』のごとく誰かにのりうつって続けさせる予定。これ即ち死霊の『死霊』」と答えていた。それは不可能だが、九章で閉じた『死霊』は、数々の思考実験を凝集させたまま、「一筋の糸のはし」を延ばし続けている。

（たなべ　ゆうすけ・博士後期課程三年）